

社会科の授業を対人援助学の視点から④

2023年11月19日 内田一樹

1. 社会科研究会・研修会での気付き

今年は様々な研究会、研修会で選択講座「東北と復興」（宮城県石巻市スタディツアーや福島第一原発事故への学びを中心に東日本大震災からの復興の今について考える講座）についての報告をした1年にもなった。発表の場や機会を生徒達には多く持ってもらうように努めてきた。しかし私自身が発信することは、昨年にはなかったので、1年行ってみて教員目線でどうか、ということを経験する様々な場で話をした。

話していく中で気がついたのは、自分が何を大事にしたいと思ってきたのかが言語化されて分かるということだった。思いが先行してまずはやってみた1年間だったからこそ、後からどんどん言葉が追いついてくるような感覚だった。生徒達の変化を目の当たりにしながら、普段は生徒と一緒に東北の人達から学ばせてもらったり考えさせてもらったりしているという感覚が大きい。だからこそ講座を行っている教員としてどうか、ということの後回しにしていたので、質疑応答や議論を通して改めて自分自身で気づくこと、他の人からの言葉で気づくことは大きかった。

先日、とある社会科の授業研究のサークルで自らの実践報告をした。石巻市へのスタディツアーやその前後の学習を含む選択講座「東北と復興」の1年間のカリキュラムの報告である。かなり厳しい言葉を投げかけられる場面もあり、言われて面白かったのは「かなり心理的な視点からカリキュラムを組んでいる」という意見だった。「いやいや、そんなことないですよ」と思ったが、どうやらいわゆる「社会科」の王道の授業からは外れているということらしい。もう一つ面白かったのは、色々やってきて「学校の防災を考えるに帰着するのはどうなの？」というような意見。これは別の研究会でも指摘された。きっと自分の言葉が足りなかったのかもしれないが、まず「学校の防災を考える」ことは命を守るという観点で大事だと思う。しかしそれだけではなく、生徒達がスタディツアーから帰ってきて身の回りの問題に目を向けて動き始めたその第一歩という意味がある。これがゴールではなく、それを教員として応援して生徒達が自分の意見や考えが一つ形になっていくことを経験することが、次の問題解決、課題解決へつながっていくと思っているが、なかなか伝わらない。

何にせよ様々な場所で文章にし、言葉にする中で改めて気づくことはたくさんある。幸いに今年は他者との対話をする機会を多く用意してもらった。その中で自分自身の物語をまさに今つくっているところなのだなあと感じる1年になった。

2. 「出口」をどう考えるか

講座の1年間の学びの「出口」は、何かの認識や知識を教え込む、覚えさせることではなく、この1年の経験や体験を元にさらに学びを深めていくきっかけにして欲しいということが大きい。もし可能ならば私と同じように東北とつながる、自分に出来る「復興」への携わり方を見つけて欲しい。この辺りだろうか。周りの人を大事にしたり、誰かの声に耳を傾けることを継続したりして欲しいが、これは私の願いであって確かめる術はない。もっと時間が経ってから、実践を積み重ねる中で見えてくるものもあるだろう。

しかし一方で思いもよらないところから生徒達にとってもこの石巻市を訪れたことによる学びの意味が大きいのだと確認することができた。私は今年高校3年生の担任であり、進路について相談を受けたり面接練習、小論文や志望理由書の添削をしたりすることも多かった。その中で、この選択講座を昨年、あるいは今年受講した生徒の多くが、自己の高校時代の学びの代表的なものとして、この選択講座を挙げていることに気がついた。対人援助系の職種や専門知識を学ぶ大学や専門学校への受験をする生徒や社会問題や社会課題を考えていく大学の学部を受験する生徒など、自分自身の今後の生き方とつなげて話したり書いたりしている。元々の興味関心があったとも考えられるが、一方で東北を訪れたことが今後の生き方の一つのきっかけにもなっていたらしい。実際に対人援助を学ぶことができる大学についての進路相談も受けた。こうした経験を経て、この選択講座の進路としての「出口」のことについて考え始めている。といっても、まずは高校での1年間の学びをきちんとつくるのが先であるので、何年後になるのかは分からないが。この講座で知ったこと、考えたことをより深められる大学をまずは私自身が知りたいな、と思っている。